
パンダヒーロー

こっこっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パンダヒーロー

【NZコード】

N3853Z

【作者名】

じつじつ

【あらすじ】

ある姉妹、グレスとミリアは日本にやってきた。

グレスは野球の助つ人を職業に。

ミリアは麻薬密売人を職業に。

そんな一人は、今日も大金を巻き上げる。

惑わらわるヒーロー（前書き）

この小説は作者の妄想です。
あまり本気にしないで読んでください。

恐れられるヒーロー

ベンチでのんびりすゞしていた平日月曜日。ネットで「月曜日しね」と書き込まれる日。あたいはいつものように頼まれた。

「お願いします、グレスさん！」

餓鬼みてえなだつせえ財布から出されたのは諭吉だった。その枚数、4枚。

こんななんであたいが動くかつての。餓鬼はほんとひちつせえ。そんなんだからイチモツもちつせえんだよ。

「足りないねえ」

「そ、そんな……」

「ちつぽけな金で動くほどあたいはお人よじじやないのぞ。これは仕事なんだよ。分かるかい？僕ちゃん」

愛棒の金属バツドを餓鬼三人に向かた。諭吉を出した餓鬼はビビッて汗だの涙だの流し始めた。

情けねえ餓鬼だ。一からやりなおせつてんだ。

「あ、あの……どうしたら助つ人として動いてくれますか？」

「そうだな。全員が全財産出したら考えてやる」

そう言うと餓鬼は目ン玉が飛び出そうなほど皿を開いて、声を合わせて「全財産！？」と叫んだ。

真昼間からうるさじつたらありやしねえ。

「そこをなんとか…」

「なんとかできねえ。いいか？　、餓鬼が「こちやこちやつるセーんだよ。出さないんならしねえよ」

すると、右側にいた餓鬼がポケットから大急ぎで金を取り出しあたに寄越した。口角を上げて笑うと、他の一人もさつせと出した。なんだいい餓鬼じやねえか。

「場所はどこだ、教える」

金属バツドを抱えて立ち上がる。餓鬼はうれし泣きしてありがとう

「じゃこますを連呼した。慣れてるもののは持ち悪い。
案内されたそこは、ある中学校のグラウンドだった。

感想、ノメント、レッスン（後書き）

感想、ノメント、レッスン（後書き）

グラウンドを見ると、他校のチームと試合する様子だつた。餓鬼の一人が歓喜の声で連れてきたぞと叫ぶと、こいつのチームメイトは喜び、相手のチームは悲鳴を上げた。気絶するやつもいたりする。

あたいはここまで有名になつては恐れられるようになつたのか。いいことだ。ここまで稼ぎがいいんだし、文句のねえ仕事だ。

「あ、あれ、パンダヒーローのグレスさんじゃねえか！」

「やつたぞ！ これで県大会へいける！ …」

と、餓鬼のチーム。

「嘘だろ！ ?あのグレスさんが！ ?」

「お終いだ！ …」

と、他校チーム。

つたく餓鬼ばかり。ギャーギャーとうるさい。

両チームの監督があたいの元へ近づいてきた。どちらも愛想の悪い大人で、タバコくさい。おまけにヤク中みたいな目してやがる。ミリアの客か？

「すまんね、これ」

およそ100万。いい額だ。

ふふんと鼻で笑うと、金を渡した監督はチームの方に戻つていった。もう片方の監督は、どうやら他校の方らしい。厳しい目つきであったいを見る。

なんだよ。そんなに勝ちてえか。

「君、どうして來たんだ？ まだ未成年がこんなことするんじゃ…」

その言葉にあたしは一瞬でむかつ腹になつた。

「ああ？ 年なんざ関係ねえだろ。金は稼げられればいいんだよ。分かつてんのかヤク中ジジイ」

「ヤク中？ はつはつは、よく言つねえ。母国から追い出された小娘

のくせに」

ついにあたいは火山のように怒りが大噴火した。

「テメエ死にたいから言つてんのか！？ミリアのヤクがなきやろくでもねえやつのくせして！こつちは仕事でやつてんだよッ！！」

あたいは持っていた金属バッドで監督を頭に殴りつけた。バキッときがなつて生き血が流れる。
ざまあ見やがれってんだ。

野球ヒーロー（後書き）

グレス

女性

およそ18歳

身長、160センチほど

容姿、緑色のショートヘア・ピンクの目・やや不健康的な色白い肌
服装、タンクトップ・ジーパン・帽子・ゴーグル

性格、横暴・乱暴・暴力的・男勝り・金好き

好きなもの、金・野球・常識人・レタス・竹の子

嫌いなもの、優柔不斷な人間・麻薬・ミリア・サッカー・面倒事・

キチガイ

家族構成、母親・ミリア・もう一人の妹

職業、野球の助つ人

グレスを知っている人間は彼女のことをパンダヒーローと呼ぶ

感想、コメント、レビュー、ご自由にどうぞ

礼を言われたヒーロー

相手の監督は運ばれた。臨時で来たやつが他校チームの監督を務めるらしい。

うまいこといけばあたいは金をもらつただけだつてのに。畜生。愛棒の金属バッドを持つてバッター・ボックスに立つ。表情が見られないように帽子を深くかぶる。離れたところにいるピッチャーチャーを見ると、ガクブルと全身を震わせている。

こりやまたヘボいボールを場外ホームランしそうだ。

ついにピッチャーチャーがボール投げてきた。これは余裕。チビでも打てる。こんな球に本気になつて打つあたいじやねえが、油断はいけねえ。

愛棒を振ると、カキンという音が響いた。おまけに場外ホームラン。どこまで飛んだかなんて考えるのは面倒だ。昔テレビで見たアニメのヒーローのオープニングテーマを鼻歌で歌いながら、相棒を担いで歩いてぐるっと一周。そして再びバッター・ボックスへ。いつもこれの繰り返しだ。だがつまらないことはない。球が打てることがうれしいからそれでいい。

当たり前のようにあたいのチームの勝ち。そしてこのチームは県大会に行けるそうな。まあ、そんなこと知らねえけど。

「ありがとうございますグレスさん！」

「うるせえ。あたいはとつとどずらかりてえんだ」

門から出ようとすると、チームの全員が帽子をとつては頭を深々と下げ坊主頭をこっちに向けていた。

日本人ってのは礼を言つのが好きなのか。

中学校を出て適当にブリック。今日は飯食つてだらだらしたい気分だ。

コンビニに向かい、適当におごきりだの買づ。コンビニを出ると、見たことのあるキチガイの背中があった。

会いたくねえ。あんなキチ女に。

礼を言われたヒーロー（後書き）

感想、コメント、レビュー、『血田ひじり』

密売ヒーロー（前書き）

グレスの妹、ミコアのお話

「お願ひします!!コアさん!」

毎日聞く言葉だ。

いや、これがいいのだが。

日本に来て数年。私は密売人になつて月何億と稼いでいる。安くくて少ない原料で作り出す私お手製のヤクはどうやら格別らしく、嘘で言つた「少ない量で長時間快樂に漫れる」。このことを最初の客がキチガイレベルで信じ、そして広めてくれたおかげでこの大金。「いくら持つてゐるのを。それで考えてあげる」

「う、50万ほど…」

貧乏人かこいつ。50万なんかで足りるかつてんだ、阿呆め。と、まあこれも日常の一コマ。ここからが楽しい。

さあ私を楽しませろ。私は退屈してゐる。それをこの仕事で埋めるんだ。

「その50万がお前の全財産か?」

「いえ、まだ他にありますか…」

「どれぐらいあるんだ?」

「あと400万は」

上出来だ。

あとはこいつの家に行つて家宅捜査するだけだ。

右腕存在のやつを携帯電話で呼び出す。家宅捜査の準備、臓器売買の準備、その他もろもろ。

このことを携帯電話で話していると、密が禁断症状を起こしている。家に案内することができなくなる前にやらねえと、こりや役立たずになる。気休めにオピウムを一錠よこした。それで一時的に正気にさせて、こいつの家へと案内させる。

案内されたのは、できたてほやほやつて感じの一軒家、3階建てだった。

密売ヒーロー（後書き）

感想、コメント、レッスン、『田中洋二郎の本』

羨ましがるヒーロー

羨ましいもんだ。

私はこんだけ大金を稼いでも、家は5畳ほどのぼろアパート。おまけにトイレは共同。日当たりも悪く洗濯物はあんまり乾かない。だからわざわざ金まで払つて乾燥機で乾かす。つたく面倒つたらありやしない。

それに比べてこの家は……。私にとつては豪邸に思える。
昔の家もこんなんだったのを覚えてる。

「で、中に誰かいるのか」

正常になつている客に問う。すると密は、誰もいないと答えた。聞きたいのはそれだけだつたのに、密は自分のことを話した。

どうやら、浮氣が原因で妻や子どもに逃げられ、罰として何もかも売られたらしい。生活に必要最低限なものだけ置いて実家に帰つたとか。そして浮氣相手にも逃げられた。なんと哀れなヤク中。なんて可哀想なヤク中。私が救つてあげよつ。

……とは言つても、こいつは生活に必要最低限のものしか残されていない。それだつたらろくなもんがないだらう。なんて言つあたじじやない、他にも手はある。

「ほお、広いだけで殺風景な部屋だな」

「すみません、何もあげられません……。この50万と銀行にある300万ぐらいしか……」

350万。まだまだ取れる。

部屋の中を見渡した。その感想を一言で述べるなら、やはり殺風景。本当に何もないのだ。キッチンには冷蔵庫、備え付けられていたコンロや流し台。リビングには小さい椅子とテーブルだけ。3つあつたうちのひとつベッドルームには、ベッドがひとつ、クローゼット、デスクに回る椅子、カーテン。ざつとこんなもん。広い家だつてのにもつたひない。3階に行ってみれば何もなく埃だ

らけ。ムカデだの蜘蛛だのいる。

「ほんと、なんもないんだな。よく生活できたなお前」

「はあ……まあ……」

羨ましがるヒーロー（後書き）

ミリア

女性

およそ18歳

身長、165センチほど

容姿、ショックギングピンクの髪・ショートヘア・緑の目・不健康な色白い肌、目に隈

服装、迷彩柄の厚着・オレンジのズボン・ふわふわした白い帽子性格、バイ・（どこか）ビッチ・キチガイ・大人しい・金好き好きなもの、ヤク（ただし吸わない）・金・18歳以上の女性・楽しいこと・ヤクを買つてくれる客

嫌いなもの、ピーマン・普通・17歳未満の少女

家族構成、母親・グレス・もう一人の妹

職業、密売人

ミリアを知っている人間は彼女のことをパンダヒーローと呼ぶ

客は曖昧な返事をした。

こんな良い家にいても、娯楽がないんじゃ仕方ないだろ？。そもそも金はどこから出てるんだか。

すると外から車の止まる音が聞こえてきた。

インター ホンを鳴らし、私はすぐ玄関へと向かう。ドアを開けると、そこには見慣れた顔が。あたしの仕事の手伝いをしてもらっているやつだ。

古い付き合いで、小学校の頃からつるんでいる。急に日本に行かなきやならなくなつた時も、どこからか持つてきただ金でこっちに来た。よくわからないがあたしに協力する。長じこと付き合つてゐるがよく分からぬ。

「お待たせしてすみませんミリヤさん」

「…この家の中にあるもので売れそうなものはない。売るならせいぜいこの家とそいつの体ぐらいだ」

「了解致しました。では準備に取り掛かります」

そう言うと彼は車から書類やらなんやら取り出してきた。客人の男は何のことやらという表情で見ていた。

家中を拝見し、細かい部分まで見る。すると彼はこう言つた。

「この家、高く売れますよ。いいところなら何百万と売つてくれる」「だ、そうだ。いいヤクをくれてやるよ。どうだ、この家売る気はねえか？」

客人の男は真っ青になり、ガチガチと歯を鳴らし始めた。薬の効果が切れてきたのだ。

なんてグッドタイミング。

「ほら薬の効果も切れてきてんだ。早く決めろ」

「あ、ああああ…、買います、買います…買わせてください！」

そして客人の男は家を高値で売り、その金すべてを使ってあたしの

ヤクを買つた。それからまだ欲しいと言い、私のところにやつてくれる。これだ、このループが面白い。

このヤク中はもう時間が分からんんだろう。だから安っぽいものばかり与えて大金を手に入れている。

ルールがなんだ。法律がなんだ。密輸がなんだ。密売人がなんだ。いいじゃないか、好きにやろうが。私はパンダヒーローという存在である限り牢獄行きになんてなりやしない。借金をすべて返すまであたしら姉妹は働く。

すべては母さんのためだ。

悪徳ヒーロー（後書き）

感想、コメント、レビュー、『田辺氏の心の底』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3853z/>

パンダヒーロー

2012年1月10日20時58分発行